山本　僕はまだ高校生ですし、先輩方は外の世界と高校生とを比較しておられるようですが、中の世界しか見ていない僕達には何とも言えません。

鳥本　記念祭を通して、自分がいたらなくて何もできなかった時でも、執行部と関係ないクラスの人や執行部に関係している友達に、すごく後押ししてもらいました。そういう友達を持っていることに気付けたことが良かったと思います。私は執行委員ではありましたが、クラスの人たちとの触れ合いみたいなのが嬉しかったです。

二. 定期戦と実行委員

高木　とりあえず、これで記念祭に関することを終えさせて頂きたいと思います。次に定期戦について話をしたいと思います。お手元の資料に第21回から今年の30回までのスコアがあります。22回と30回は敗戦しております。ではどうぞ。

山本光　今年は県西の方から西宮市民グランドでなく県西でやろうではないかと強く要請されました。その主旨は定期戦も低迷化しているということでした。確かに運動部はちゃんとするし、運動部では盛りあがっているのかもしれませんが、定期戦というのは芦高では自治会活動であり、運動部の活動ではないのですが、県西では非常に参加意識が低いので、内容充実のために県西でやったらどうかとかなり押されました。当時記念祭が6月に変わったばかりで、ややこしい時期だったので、今年は勘弁してほしいと言ってなんとか許して頂いたんです。しかし、芦高の生徒の中でも定期戦に参加も応援もせずに、単独行動をとる者が増えてきていて、自治会活動として成り立たなくなってきているという現状があります。

高木　曽我さんはどうですか？

曽我　私は多分3代目の女性運動部長と言われて、生徒にも運動部の方にもなめられたところがあったんです。一番大きな行事として定期戦を手掛けましたが、私達の頃は山本光一君がおっしゃったように自治会活動という捉え方ではなく、進んで運動部がやろうと意欲を持ってやっていたのでかなり楽でした。一般生徒の方も運動部の方達を温かい目で一生懸命応援して参加してくれたのですね。私にとっての定期戦は生徒と運動部員が一体となって作りあげたものだったので、先程の話のような現状に対して寂しい気がします。

佐藤　僕達の時の前哨戦は交互に相手校へ行っていたのですが、県芦の生徒は県西でやる時も詰めかけて行きますが、県西の生徒は自分の学校でやっていても応援者が少なかったわけです。そのことが県西側からすればもう少し盛りあげなければと思う理由になっていると思います。県芦では野球を知らない人でも見にきてくれる、応援してくれる。そういう点がよいと思います。

山本　僕の代の県西の会長さんがぼやいておられたのですが、県西でやっても芦高生が見に来るのはなぜか。芦高生は野球を見に行くと勝つという気持ちがあります。県西生は定期戦を見ても、絶対勝つという気持ちがありません。県西生からするとなぜ負ける試合を見に行かないとだめなのかという気持ちがある。芦高生というのはようするに勝つことを期待しているから見に行けるんですよ。

佐藤　今年からは変わるでしょう。(笑)

高木　他にございませんか。

山本健　やっぱり僕は県西に両校の生徒が物理的に入りきれるのなら、いいと思うんですけど、西宮市民グランドでやるというのは一日かけて全部の運動部が一度に戦う、それで両校の生徒が応援にくる、そして僕は芦高生の一員として所属している学校を応援するんだという意味で、一体感なり愛校心なり学校に対する帰属感なりが生まれてくる。それが大切だと思います。僕はすごく印象的だったんですけど、四月に入学して五月に定期戦がありますから、一年生の時に実行委員に選ばれてやったんですよね。当時はまだ硬式野球部が西宮のグランドで試合してたんです。高校野球といえば全国的に人気のある試合でしたから、グランドのスタンドに入りきれないほど芦高生が並ぶんですよ。それで9－8かなにかで勝ったんですけど、最後にはもう今年の藤井寺球場ではないですけど、言わなくても皆立つという感じでした。「さあこれで勝ち逃げなんだから、

校歌を歌おうぜ！」と誰かが言いだして、そしたらみんなが校歌をガーッと歌いだすんです。あの時の校歌を歌うみんなの声の大きさというのはものすごかったですね。僕達は応援団で「ヤーッ」とやってましたけど、あれだけの校歌を聞いたっていうのは、一番すごかったと言われたし、聞いている僕らもさぶいぼがたってくるぐらい興奮したんですよね。普段の練習の時なんか、応援団の連中が音程をはずしてワーワー声あげて、その声しか聞こえてこないけれど、あの時には応援団の声は聞こえてこずに、みんなの校歌を歌う声だけが聞こえてきたという、ものすごい興奮だったんです。これで「ああ芦屋高校に来てるんだな」というのを感じられたというのがありますからね。確かに運動部のための定期戦という部分もありますけれど、記念祭と同じで、やはり一般生徒に対して芦高生の一員だと感じさせ、且つ僕が私が通っている芦屋高校の運動部はこういうものだと考えてほしいものですね。それを一般生徒に分からせるというのが執行部の仕事だと思う。そういうのが解った上で会場を変えるというのならいいんですけど…。

高木　他にどうですか？定期戦のことで。

山本健　定期戦の旗はあがっているのですか？あれは僕らの時だったんです。僕らの時までは日の丸が真ん中にあがっていたんです。思想的にどうという話じゃないですけど、僕らの定期戦なのだから、旗というのは一つの集まりの象徴になりますからね。記念祭の旗があるのになぜ定期戦の旗がないんだということで作ったんです。だからそんなに古いものじゃないのです。

高木　他にないですか？

金延　運動部に入っていない者達で、例えば選抜のソフトボール対抗試合というのはできないのですか？

全員　（笑）

山本健　それは定期戦とは別にですか？

金延　いえ定期戦の時です。グランドが空いてるから…。硬式野球は使わせてもらえないんでしょう。

高木　ソフトボールはできると思いますよ。

金延　もしできたら５回戦ぐらいでやって、後に両校教員同士対抗試合をするとか…。

全員　（笑）

金延　山本健会長が言われたことはすごく魅力的ですよね。全校が応援する工夫の１つとして、そんなことができたら面白いなあと思うんですけど…。

山下　その後にすぐ記念祭がやってくるということを忘れちゃいけないと思います。その頃は皆バタバタしてるんじゃないでしょうか？

金延　芦高にかわってきた時、定期戦は記念祭よりも感動的でした。ずっとあのような経験がなかったから、この学校はすごいなと思いました。文化祭は自分も経験してるから、規模が大きいなぐらいだけど、定期戦はないからね、大事にしたいなと思います。みんなが参加できたらいいのに…応援でね。今は応援の中心になる実行委員を集めてくるのでさえしんどいようだからね。

定期戦実行委員

高木　定期戦実行委員の選出に関していろんな問題点やあるいは配慮しなければならないことがあると思いますが、皆さん生徒の立場でどうですか？

安藤　僕は一年の時に選ばれました。声が大きいだけで選ばれたんですけど、途中で降板したんです。やはり、一年で入学してきていきなり、何もわからない状態でクラスで選ばせるのはちょっと無理があると思うんですよね。僕らの代には柔道部の子が重なったんです。そんな問題もありますしね。そういう問題が今だに残っているんじゃないかなと思います。

高木　それに関してどうですか？

安藤　応援団の山本さんはいかがでしょうか？

山本光　選出方法に問題があると思います。好きでもないのに応援団に入れられて、先輩面されて半ば拷問みたいな形で「声だせ！」といわれたり、「39分間動くな」といわれたり、つらいところもあると思うんです。

生徒が見にこない一つの原因として県西の応援団の力が弱いんですよ。芦高は応援団がリードして「今度定期戦で野球の試合があるから皆見に来て下さ

い」と書いたビラを配るなり、校内放送するなど宣伝活動してるんです。県西はそういう活動をしないんですよ。だから生徒も見に来ない。応援練習だって県西は、今一つ盛り上がっていないみたいな感じでね。応援練習をしながら「校歌を覚えよ、応援歌を覚えよ、定期戦歌を覚えよ」と言ったら帰属感が出てきて、それでは「一つ応援に行こうか」ということになりますから。

実行委員を廃止する云々には僕は廃止しない方がいいと思うんです。そうやって音頭をとって応援に来る態勢ができていないと、芦屋高校も運動部の試合を見に行かないというふうになっていくかもしれないなと思います。

定期戦実行委員になった人のなかには、良かったという人と良くなかったという人があると思うんです。危険な賭けなんですよね。

僕も定期戦実行委員をやったんですけど、「お前ら3年生が笑わせるけど絶対に笑うな」とか言われても、3年生は、それを知ってるから絶対笑わすんですよ。それがまた滑稽なんです。前にでてやってるのは1年生の定期戦実行委員ですから、同じ身内で関心があるとか、連帯感が出てくるんですよ。

僕の実感では、一番最初に自治会の仕組みが分って、一番最初に芦高生にたくさんの友達が増えるのは定期戦実行委員だと思います。一緒に苦労してるから何でも話せるし、定期戦実行委員やってサッカー部やラグビー部に散っていったメンバーともいまだに話ができますしね。

しかし、全員に期待して定期戦実行委員を選ぶのは非常に危険だし、定期戦実行委員は限界にきてるなあというのを今年の定期戦実行委員を見て思っているところです。

高木　開会式の後の応援合戦で非常にまとまって応援ができた時は勝つというジンクスみたいなものがありますね。試合そのものに勝つ。県西の方から言いますと、いつもそれで県芦に負けている、何とかせないかんというような危機感はあったんです。最近県西は応援が昔に比べて良くなってきたんではないか、そういうことが今年の敗戦に作用したんではないかという気がしてるんです。

やはり定期戦においては応援というのは非常に大きなウエイトを占めている。しかも試合をする者にとっては、開会式の応援合戦はものすごく力になるんですよね。実行委員会制度というのは選び方によっては考えていかなければならないけれども、僕は応援団なり実行委員のあの方法というのは芦高の知的なパワーだと思うんですね。

大仁　佐藤君どうですか？生徒課と執行部の合同会議の時、「実行委員制度をやめろ」という話が出て、その時にいろいろ言ってたでしょ。

佐藤　「やめろ」と言ってたのは先生の方からです。

大仁　そういう意見が出てきて君はすごく反対してたね。

佐藤　そうですけど…。一年生の中から実行委員を無理矢理ださせたみたいになりますから、応援したらなあかんという感じにクラスである程度なるんですよね。一年生から出すのを止めると、今度は一年生が完璧にお客さんになってしまうんです。ただ見てるだけで。そういう意味からいくと、ＨＲでワイワイ騒いで、それが結構きいている部分があったんです。僕らの時問題になったのは、「どうしてもやりたくない」というつわものがいてもめたんですよ。すごい問題になりまして例えば登校拒否とかそういうのが表面に出てきて、「やめろ」といわれたんです。メリットを考えると、やめるより存続させといた方がいいんじゃないかと思います。

山本健　僕の時には応援団の仮入部という名で選ばれたけれども、今は定期戦実行委員になった。これは名前がかわっただけではないと思いますね。僕らの時は仮入部という名前で象徴されたように、先輩は「お前はもう応援団の一員なんだから」という意識をもって指導してたと思うんです。そうじゃなくて、なぜクラスから強制的に選ばれるかというと、定期戦で実際に沢山の運動部を応援しようと思うと人数がいる、その為にクラスから選ばれているんだから、定期戦の為に選ばれている。定期戦の応援を円滑且つ効果的に行うために選ばれているんだと思います。応援団の為じゃなくて定期戦の為だということをはっきりさせようという意味で、名前が応援

団の仮入部から定期戦実行委員という形に変ったわけです。だから応援団の立場からするとそれをもっと意識していろんなことを教えたりすることに気を使わないといけない。執行部の側からすると選出方法をもう少し変えるということを意識し、選ばれる一年生にも応援団に入るんじゃなくて定期戦の為の応援なんだということを徹底させていくのがいいと思います。

永田　実際僕も一年生の時にやらされてたんですけど、じゃんけんで負けたから仕方なくやってたみたいな感じでした。一年生になった時点で「定期戦があるから実行委員を選ぶ」といきなり指導委員の方から聞かされました。定期戦って何たるかもわからないまま定期戦実行委員をやってた。実際に何の説明もほとんどなかったし、意味も何にもわからずやってたという感じなんですね。そういうところにも若干問題があるんじゃないかと思います。

高木　定期戦の意義みたいなお話しを願えませんか。

佐藤　運動部にとって定期戦は、まず小手調べ的なところがあって、春先からスタートしてこれで勝ったら阪神大会とか県大会とかいうのがありますから、いい調子で滑り出せるのです。あと運動部長からみると、定期戦とかで運動部が頑張ってるのを他の文化部の生徒に見てもらえれば、若干予算の比率が運動部の方が高いもんですから、それのための宣伝的な意味もあって、僕は活躍してくれるのはうれしいなという気持ちがあったんです。

高木　他にありませんか？

安藤　定期戦は今までほとんど勝ってきましたし、今佐藤君が言ったみたいに、運動部はいい滑り出しができると思いますけれども、あまり勝つもので県西では近年「我が部は遠慮させてもらいます。」という部があるらしいんです。そう考えると県西は運動部が定期戦というものを考えているんではなくて自分の部のことだけを考えているようになってきているなという気がしますね。さっき山本光君がいっていた定期戦の会場を変えたい云々のこともあるし、これらの課題を執行部が県西に働きかけて、盛り上げていかなければならないと思います。その方法を現執行部に考えてもらったらいいんですけれども。

三．部活動について

高木　この十年間文化部の活動、運動部の活動はいろいろあったと思うんですが、まず最初に文化部の活動を金延先生の方から、運動部の活動を東原先生から言ってもらいます。このコーナーは、部の活躍ということで話を進めていきたいと思います。

金延　別表１の「文化部・書記外局の活動の推移」を見て頂きますと、この10年間の前半部分で結構いろんな動きがあるんですよね。例えば書道部がなくなったこともあるけど、漫画研究同好会ができて部になるとか、園芸飼育部に人が集まらなくなったとか、航空機研究同好会が２年間あって廃部になったり、民族学研究同好会があって1年間で廃部になったりしています。この辺の動きをみると、興味関心のある人間たちが仲間を集めて何かやろうやないかという動きがあったんだろうなという気がしますね。ところが最近は、自分達の興味対象を仲間を呼んで一緒にやろうやという気持ちや雰囲気が全体として無くなってきているという感じがします。あっちこっちに顔だしてやりたいことをやってみようというようなエネルギーが文化部の方にはあったんだけど、それが現在ではないという感想をもちますね。それから、コンクール等のある文化部の成績で整理しながら感じたのは、本校はやはり将棋が強いなと感じました。将棋がずっと良い成績をとってるんですね。文化部にとって非常に恥ずかしいことですけど、文化部や書記外局の活動の推移をみてましても、コンクールの成績をみてましても、残念ながら文化部というのは顧問に大きく影響されるなという感じがします。書道部が廃部になったのもそれまでの顧問の先生との関係が大きいようですし、漫画研究同好会がずっと続いているのも顧問になられた建先生の存在も大きかったと思います。コンクールの成績でもそうです。将棋は指導なされる先生がこの10年間変わらずおられるという事が大きいと思いますね。顧問の影響が大きいということが残念だなあと